

日本労働年鑑 第27集 1955年版  
The Labour Year Book of Japan 1955

第二部 労働運動

第五編 労農政党

第五章 共産党

総選挙の結果について

四月一九日に衆議院、同二四日に参議院の選挙がおこなわれ、共産党の川上貫一氏は大阪第二区から衆議院議員に当選したが、日本共産党中央委員会は、この総選挙の結果にあらわれた国民の統一行動の大きな前進を高く評価し、今後の党の努力の方向を明らかにした次のような発表をおこなった。これは党の基本文献の一つとして極めて重要な意味をもつものであった。

(前進せよ—総選挙の結果について)

(一)

今回の総選挙の結果は、これまで行われたどの選挙にくらべてみても比較にならないほど、国民大衆は巨大な前進をとげた。

それは、国民各階層の統一行動が、これまでの部分的な統一行動から、全戦線にわたる壮大な統一行動を開始したことによって特徴づけられている。

そして、それに応じて民族解放民主統一戦線の基礎も、労働者階級を中心に、国民大衆のなかにしっかり打ちかためられてきた。

今度の選挙で吉田自由党はようやく第一党になることはできたけれども、過半数はおろか、解散まえより議席は減少した。アメリカに援助され、権力をその手に握り、十数億に達する莫大な金を使って、彼らにとっては、いたれりつくせりの有利な条件で行った選挙の結果がこれである。

明らかに彼らは国民から不信任された。それは形のうえにあらわれた議席の減少というだけではなく、実質的には、どのようにしても、アメリカに従属する反動勢力の力によっては、今日の政局を安定させ、もちこたえてゆくことができなくなっていることを、この事実は証明している。

改進黨ならびに鳩山自由党ののびなかったのも当然である。再軍備を強調し、軍国主義の復活を旗印にする売国的反動幹部に指導されている彼らが、国民の支持をうけることができなかつたのは、当然である。良心的な改進黨員諸君は、改進黨の看板に損をしたと告白している。また、鳩山自由党の多くの諸君も、わが党との接近を深めている。

米日反動勢力と国民の愛国民主勢力との対決が迫られている今日の情勢のもとでは、かつての支配階級の道具であった二大保守政党が、交互に政権のたらい廻しをするような条件がなくなっているのである。

左、右社会党、とくに左派社会党が、かなりの進出をとげたことは、再軍備と軍国主義の復活に反対する国民の期待が革新政党という名によせられた結果である。これは、保守政党に対する不信の反映でもある。

いまの国民大衆、とくに労働者階級が、左、右社会党の再統一に強く反対しているのは、右派社会党の幹部が、自由党や改進黨の反動どもと、本質的にはかわりのないことを見抜いているからである。事実、今度の選挙を通じて、右派社会党は、労働者階級から全く見はなされたことを証明された。

右派社会党の幹部たちが、左、右社会党の提携によって、いわゆる社会主義政權論なるものを持ち出しているが、これはかつて支配階級が保守二大政党をあやつって彼らの代弁をさせたのを、今度は保守と革新という形で行おうとするゴマ化しにすぎない。しかし、国民大衆、とくに労働者階級は、このようなインボウを見抜き、左派社会党の幹部をケン制して、右派の提議にたやすく応じさせようとしな。もし、左派社会党の幹部がこのような取引に応じ、反動勢力に奉仕するならば、彼らは労働者階級から痛烈な反撃をうけるだろう。

以上のような政局の情勢は、あきらかに米日反動勢力と国民の愛国民主勢力との深刻な対立の反映であり、国民の力の巨大な前進によって裏づけられているものである。すなわち、国民は吉田自由党に安定勢力の議席を与えず、改進黨、鳩山自由党のファッショ勢力の伸張を阻み、左、右社会党の両統一を拒み社会主義政權論の虚名を否定しているのである。

まさに反動勢力は、国民の力によって根底からゆすぶられている。そして、労働者階級を中心とした国民の力が巨大な統一へ、新しい前進を開始した。

(二)  
わが国民の前進は、世界の平和を愛する民主勢力の大きな支持をうけている。

「現在当事国の相互の話しあいにもとづく平和的手段で解決されえないような紛争問題ないし未解決問題はない」と言明したマレンコフ首相の、確固としたソ同盟の平和政策は、わが国に深い影響と確信を与えた。

また、それにつづいて、朝鮮休戦解決のために行った周恩来首相の提案は、わが国民の熱烈な賛成と支持をうけた。

ソ同盟、中国ならびに人民民主主義国の確固とした平和政策の堅持と、その積極的な推進は、アメリカを中心とする戦争屋どもに重大な打撃を与え、彼らは一層ロコツに各国の反動どもを脅迫し、懐柔して全面的な再軍備計画を実行させようとしている。

しかし、もはや彼らが、どのような言葉のうえのゴマ化しを行おうとも、すべての人々は、ソ同盟、中国の平和政策の正しさとその勝利的な前進をはっきりと認めている。わが国の反動勢力は、このような国際情勢の中で深刻な苦悶を味っている。

彼らは、一層ロコツな反動化の道を進みつつある。彼らにとっては、もはや、全面的な再軍備と軍国主義の復活を行い、アメリカへのドレイ的な屈従を一層ロコツにすること以外に生きる道はなくなっている。

そのため彼らは、旧軍閥、特権官僚の復活に血道をあげている。彼らはまた「平和不況」に名をかりて、産業の合理化を強化し、買弁独占の集中と、産業の全面的な再軍備化への道をいそいでいる。彼らはまた、国土の軍事基地化を土台として、綜合開発に名をかり、半封建勢力の強化をおしすすめている。

彼らはこのような基礎のうえに、吉田政府を維持し、軍国主義的諸政策を遂行しようとしている。だが、彼らの企ては、今度の選挙において重大な挫折をみたのは、すでにのべた通りであ

る。  
わが党は、このような内外の情勢にもとづいて、新しい国民政府樹立に向っての闘争綱領を最前面におし出して、総ての愛国民主勢力の統一と団結を提唱した。

米日反動勢力の全面的な再軍備政策と軍国主義との復活強化に反対する広汎な国民大衆は、このわが党の提唱によって闘争の目的をしっかりとつかみ、統一行動は全面的に発展した。

それはまた、終戦以来、すべての反動的既成政党によって行われた政治に深刻な不信をもっている国民大衆の期待にぴったり適合したものであった。「新綱領を国民のものに」というわが党のスローガンは、今度の選挙闘争を通じて、飛躍的に具体化されたのである。

(三)

わが党の当選者はただ一人である。そしてわが党の得票数は、去年の十月選挙に比して約二十数万票減少している。この事実はけっして軽視することはできない。われわれは、この事実に対して厳密な検討を加えるであろう。

しかし、もしこの数字に現われた事実だけを見て昨年十月選挙よりも党活動が衰退しているとみたり、この数字だけがこんどの選挙でかちとったわが党の成果のすべてであると考えれば、それはきわめて危険な敗北主義に陥るであろう。

わが党は今度の選挙闘争において、昨年十月の選挙闘争にくらべて、比較にならぬ大きな指導力を発揮し、かつ現実到大発展の基礎をきずきあげている。

何よりも、わが党が今度の選挙闘争で果たした重大な役割は、これまでの部分的な統一戦線運動を、国民各階層の全戦線にわたって拡大し、国民の勝利の力を大前進させたことである。

すでにのべたように、今度の選挙にあたってわが党は、新しい国民政府樹立をめざしての闘いを全国民に訴え、そしてこの訴えが熱烈な支持と歓迎を受け、国民の意志を統一するうえで偉大な力を発揮したことは、事実がこれを証明している。

わが党のアップールと、精力的な全党をあげての献身的活動の結果、国民の統一は、政治的にも、組織的にも数段の発展をとげた。

そして、党と国民との結びつきも非常にひろがりかつ強固になった。それは、選挙後の今日、わが党と共同し、わが党と連けいすることのできる当選者は、数十名の多数にのぼる事実として証明されている。それは、労働者、農民の勢力とを代表する人たちから、ブルジョア民主勢力を代表する人たちにいたる、全戦線的な進歩勢力をふくんでいる。それは、労農党から自由党にいたる各党、各派にわたっている。

しかも重要なことは、これらの国会内統一勢力はわが党の提唱した綱領にはげまされた、各党、各派、各大衆団体の下からの統一選挙行動組織に基礎をおいていることである。いまや民族解放民主統一戦線運動は、この選挙闘争を通じて、確実に国民の意志となり、行動となって全国的な発展をとげることができた。いま、具体的に全国各地における、その主要な事例をあげてみよう。

北海道では、わが党と労農党を中心とした強力な統一選挙闘争の展開は、左派社会

党をはじめ改進黨や自由党内にも深刻な影響を及ぼし、そのなかの多数の勢力を統一戦線に参加させ、また参加させる条件を促進し、労働組合をはじめ各大衆団体の支持のもとに、それは次第に全道の指導的政治勢力として発展しようとしている。

神奈川県においては、労働組合を中心とした統一選挙闘争は、農民大衆との結合をつよめながら、ブルジョア民主勢力との連繋も深まり、ここでもこれらの統一勢力が全県民の政治的指導勢力として発展する基礎をきずいている。

岡山県においては、わが党と労農党を中心とする県下のほとんどの全民主団体が統一選挙に結集し、大きな成果をあげている。

石川県においては、わが党と労農党が中心となり、ブルジョア民主勢力を代表する改進黨との全面的な公然たる共同闘争を展開し、林屋国務大臣を叩き落している。

山梨県においては、県内反動勢力(知事、検察庁、山林地主その他反動ボス)の結社、脈々会に反対する全民主勢力の統一に成功し、打倒脈々会の闘争に勝利し、県内の政治情勢は、この統一戦線勢力の指導権の確立が前進している。

埼玉県においては、吉田政府の官房長官、片倉製糸の番頭福永健司にひきいられる自由党はわが党の政治的指導と援助によって内部分裂し、総選挙と時を同じくして行われた知事選挙において統一派大沢候補は、圧倒的な勝利を獲得している。ここで教訓的なことは、大沢知事は自由党の名で立候補したが、福永らは革新の名を被った長谷川を右派社会党から立候補させ、民主勢力の攪乱を図ってきたことである。埼玉の自由党は、いま、反福永・反吉田の旗印を公然とかかげて、わが党をはじめ労農団体との統一戦線に参加の気運にある。これらは中小地主、富農ならびに中小企業の要求にその基盤がある。

栃木県においては、わが党と左派社会党との緊密な統一が全面的に打ち立てられ、労農大衆団体の統一も全面的にすすみ、あわせて改進黨内の民主勢力も、この統一戦線に参加してきている。

その他、山口、広島、島根の各県においても、わが党と社会党の統一は前進し、労農大衆団体に支持されながら発展している。

同様のことは、秋田、山形、岩手、宮城、福島など東北の各県についても通じていえることである。

大阪においては、わが党候補の唯一の当選者を出したところであるが、ここでも左派社会党、改進黨、自由党内の民主勢力の統一は前進した。

東京においても、選挙中の統一戦線活動は、その成果を十分にあげることはできなかったとはいえ、選挙闘争前後を通じて全都の主要労働組合における統一運動の発展、文化戦線の統一前進、改進黨、左右社会党内の統一勢力との提携の前進など、統一は発展している。

福岡県においては、炭坑ならびに金属、国鉄労働者などを中心とする政治的統一行動は、巨大な革命的エネルギーを蔵しつつ、全県的な全民主勢力の指導勢力として成長をとげつつある。ここでも下部では、左派社会党との統一は発展している。

われわれはこのような事実をくわしくあげるならば、なお無数の例証を数えることができる。

全国各地でのこのような統一戦線の全面的な発展は、中央における政治的統一行動の発展と固く結びついている。すなわち、日中、日ソ国交調整政治同盟、日中貿易促進

政治同盟、中小企業議員連盟等々の国民的政治行動組織の活動がそれである。

しかも、これらの大きな統一行動と統一戦線の発展は、決して選挙のための一時的な結びつきではなく、すでに恒常的な組織として選挙後においても、系統的に活動をつづける体制をとっていることにこそ、重要な意義がある。

以上のような事実から、われわれはつぎのような結論を引き出すことができる。

第一、統一戦線の発展は、党の独自活動の強化と不可分のものである。よし党の主体力が弱いところにおいても党中央の方針を正確に理解し、この両者を固く結合して活動したところでは、飛躍的な発展をとげ、党の信頼と権威は政治的にも組織的にも広汎な大衆の中へ浸透した。

第二、この両者を形式的に理解したところでは、統一戦線の発展は、実際ある条件に比して、大きく立ちおくれた。

統一戦線活動において、党の独自活動を軽視したところ(例えば、兵庫、長野、富山、四国の一部など)では統一戦線の発展もおくれた。

その反面、党の独自の活動を強調はしたが、統一戦線への意識的努力を軽視したところでも、結果において、無数の統一行動を、統一戦線に結集することに立ちおくれた。

第三、労働組合を統一的に指導し、これを統一勢力の中心勢力として指導したところは例外なく統一戦線を発展させているが、これを軽視したところでは立ちおくれた。

また、全体として農民勢力に対する党の指導力の弱さは、依然として統一戦線の発展を阻んでいる、もっとも大きな欠陥である。

第四、国民各階層のどんな小さな民主的要素でも惜しみなく前進させたところは、統一戦線も発展している。これに反して、統一戦線が大きく発展する条件があるにもかかわらず、民主勢力に対する限界が狭く、ブルジョア民主勢力やインテリ層などを軽視したところでは立ちおけている。

だが、いろいろの成果や欠陥はあるにせよ、こんどの選挙闘争を通じて、わが国の政治情勢は、国民の統一の著しい前進によって、これまでの政治関係を基本的に転換させる基礎はうち固められ、その政治地図は書き改められる段階に近づいた。それは国民の勝利の道に、ますます確実さを加えたことを物語っている。自由、改進黨、左、右社会党内ならびに特権官僚、旧戦犯軍閥どもの反動どもは次第に追いつめられ、既成反動政治勢力は、分裂、解体、再編成等の過程を通じて孤立化への道においつめられようとしている。

(四)

一般的な情勢としては、以上にのべたように、国民の統一行動と統一戦線は大きく前進した。そして反動勢力の矛盾と混乱と孤立化の方向は、いよいよ明らかになった。

しかし、このことは、決して、国民の力が確固不動の勝利の体制をうち固めた、ということの意味しない。

否、反動勢力は、なお強大な力をその手に握っている。それは参議院選挙の結果にもみられるとおり、彼らの行政組織が特権官僚を多数進出させ、農村の封建的地盤にはなお強い支配力を維持していることを示している。かつ、追いつめられていく彼らは一層狂暴にファッショ化して彼らの支配力の維持に全力をあげてくるだろう。

まさに今度の選挙闘争における統一戦線の発展は、反動勢力との対決への、新しいスタートにすぎない。

民族解放民主統一戦線の発展と党の発展は、不可分のものである。統一戦線のための活動と党の独自活動とは、不可分のものである。

このことを理解するならば、今日の統一戦線勢力の弱さの集中的な表現が、わが党の力の弱さとして表現されていることを理解することができる。

今度の選挙闘争において、わが党の活動の規模は飛躍的に拡大し、国民各階層各党各派の愛国民主勢力と結合をつよめたとはいえ、しかしまだ、全国民を団結させるだけの力量をかちとってはいない。

いま、党を強め、党を大きくすることは、国民的要望の中心的課題となっている。それは単に、一般的、基本的な問題としてだけではなく、民族解放民主統一戦線の発展と勝利のための戦術上の環になっている。われわれは、このことを正しく理解しなければならぬ。

そのために、われわれが果さなければならない任務は、労働組合内における党の指導権の確立のために、いま一段の努力を払うとともに、とくに農民の大多数を獲得することに、党の主要な精力を大胆にそそがねばならぬ。それと同時に、国民各階層とのあいだの、全面的な結びつきを拡げ強めねばならぬ。なぜなら、今日、いささかでも、国民の民主的要素を発展させることは、全面的な再軍備と軍国主義の復活を強行しようとする反動勢力のファッショ政策に対して国民の基本的要求をかちとる道であるからである。

労働者、農民の中に、党の指導権を！党と国民各階層との全面的な結びつきを！これが、今日、わが党の中心任務である。  
そのため、われわれは平和を愛するすべての愛国民主勢力と、一切のひとりよがりと排他主義を排して、一層献身的に共同する必要がある。

党がもし、ひとりよがりと排他主義をすて切れず、国民との固い結びつきを打ち立てられないならば、党が提唱し、国民の支持をうけている、新しい国民政府の樹立を要望する国民の要求は実現できず、党は実行の党としての資格を失い、口先だけの党となってしまおう。党のひとりよがりと排他主義の傾向は、今日ではもはや、国民の大統一を阻害する、最も大きなつまずきの石となっている。

党のひとりよがりと排他主義の、残りかすを一掃し、国民に奉仕する党風を、一層高め、国民との結合を徹底的に強めよ！  
うむことをしらぬ粘り強い説得と行動によって、党の独自活動を旺盛にし、党の信頼と権威を国民の中に不動のものとなせよ！

(五)

党と国民との結合を、全面的につよめることが、今日、民族解放民主統一戦線の発展と勝利の環になっていることは、以上にのべたとおりである。  
そのためには、現在の党活動における主要な欠陥を検討し、その改善に一層の情熱をもって当らねばならぬ。

われわれは、先の選挙闘争の経験から、その教訓をみちびき出した。その教訓は、今度の選挙闘争に至る期間のうちに、生かされ、党活動の改善に大いに役立った。しかし、その教訓は、今日でもまだ基本的には生きている。それとともに、われわれは次の諸点について一層の努力を払う必要があると考える。

第一、党全体の質の向上を図るうえにおいて、今日細胞から中央にいたる幹部の政治的指導力の向上を図ることが、重要な課題となっている。  
幹部が、何よりも守らねばならぬ鉄則は、党の任務—決定の実行に、もっとも忠実でなければならぬことである。

そのため幹部は、次の点について意識的努力を払う必要がある。それは

(イ) 不断の理論学習につとめ

(ロ) 党の諸決定を正しく理解する能力を養い

(ハ) 政治情勢に対して自主的に判断する能力をたかめ

(ニ) 党内の意志を統一する指導能力と

(ホ) 大衆闘争を指導する力量を、かちとるために努力することである。

もし幹部が主観的になり、党の任務や決定を自分の主観で解釈し、その指導を行うならば、必ず偏向を生むであろう。それは必ずひとりよがりとセクト主義を導き出すであろう。それは党をあやまると同時に大衆をもあやまり、党と国民との結びつきを阻むであろう。幹部の質の向上のため、各級機関の責任において幹部集会を系統的に組織し、理論学習と、党の任務と決定の理解の徹底をはかり、党内の意志を統一し、党内情勢の不断の検討と大衆闘争の状態の検討を行い、党活動の改善に不断の努力を払う必要がある。上級幹部は、下級幹部の育成、向上に責任をもたねばならぬ。このさい特に上級幹部が、自分の好みに流れないように注意することが大切である。なぜなら、そこから必ず無原則的な不和対立が生ずるおそれが生じ、また、なれ合いと官僚主義を生み出すおそれがあるからである。往々にして党の思想的統一、党のボルシェヴィキ化といふことの名のもとに、党内の意志の統一のために忍耐づよい努力をぬきにした、かたくなな排他的傾向が生れていることに注意しなければならぬ。

第二、党の系統的な日常活動を一層、旺盛にすることである。旺盛な日常活動の蓄積なしに、党と国民との結合を考えることはナンセンスである。だが、まだ党内において日常活動の発展をはばんでいる大きな欠陥がある。それは合法、非合法活動の結合ではなく、これを分離しているところに主要な原因がある。これは非合法体制の形式を、あたかも原則であるかのように考えている形式主義にもとづいている。非合法体制は手段にすぎぬ。それ故、非合法体制が整備されればされるほど、合法的活動を公然と大胆に行うことが可能となるし、またそうしなければならぬ。このことによって、日常活動を旺盛にし、党と大衆との結合を深め強めることが必要である。非合法主義の弊害は、また党内になれ合いと、官僚主義を生み出し、しらすしらすのあいだに党を小ブル化してしまう。なぜなら、党と大衆との結びつきを弱めるからである。党の合法非合法の活動は、単一指導部の指導のもとに大衆との結びつきをつよめる闘いのなかで、固く統一されねばならぬ。

第三、さきにも述べた通り、党と国民との結びつきを全面的に押しひろげること、そのために、労働者のなかにいよいよ深く強く党の組織の根をおろすとともに、農民の大多数を獲得することに一段と努力を払わねばならぬ。

それとともに小市民層、ブルジョア進歩勢力との結びつきにも積極的な努力を惜しむではならぬ。われわれの一部には、労働者階級のヘゲモニーということをも形式的に理解して、政治的にも組織的にも、農民、小市民層、ブルジョア進歩勢力などに対する積極的な工作を軽視している向きがある。これは誤りであろう。

労働者、とくに拠点経営の労働者を決定的につかむことの重要さはいうまでもないことであるが、そのことをもって他階層の愛国民主勢力に対する工作を軽視してよいということではない。また拠点労働者をつかみ、この闘争なしには、他階層の闘争も行いえないということもない。労働者階級の前衛としてのわが党の指導は、国内のすべての愛国民主勢力に直接及ぼされなければならぬし、また、その条件も十分熟している。このことは、こんどの選挙闘争においても十分立証されている。全体として、愛国民主勢力を一步でも前進させることは、全般的な政治活動の自由を著しく前進させることになる。

第四、闘争戦術の運営に一層熟達せよ。このことは今日、ますます重要性をおびてきている。なぜなら、米日反動勢力は、朝鮮休戦に関する周恩来首相の提案をケイキと

し、ソ同盟、中国を中心とした確固不動の平和政策の推進によってアジアと世界にひろまった、新たに強まった平和の要求のまえに、新しい戦争準備の体制を強化してきているからである。それは、わが国において、アジア人同志たたかわせる政策を一段とロコツにおしすすめてきていることにあらわれている。彼らはそのために、国内の体制を急速に軍事化一辺倒に編成しようとしている。次の国会では必ず前国会で流されたファッショ的反動諸法案を再提出するであろう。また、いま平和不況に名をかりて、全産業の合理化をロコツに押し進めているのも買弁的独占資本への集中と、産業の全面的な軍事的編成への過程であるのは明らかである。そして、国内反動勢力のアメリカへの従属化は政治的にも経済的にも一層ロコツとなり、従って国民に対する攻撃も一段と暴虐になっている。このような情勢のもとでは、個々の闘争戦術といえども、自然成長性のままに流されるならば、必らず押しつぶされてしまうであろう。従って、闘争戦術の指導に熟達することは、極めて重要な段階にきている。個々の闘争戦術といえども、政治的に指導され、統一戦線戦術と結合されないかぎり勝利は困難になってきている。

日常闘争を政治闘争へ発展させる道も、この方向へと意識的に運用することをわすれては、不可能となってきている。

今日、闘争戦術を運用する環は、再軍備と軍国主義に反対する平和と民主的自由に対する闘いを全面的に発展させることにある。

第五、宣伝活動の拡大と系統化に努力せよ。これについては、すでに党機関紙誌の拡充を中心にして、努力が重ねられているが、さらに中央機関紙誌を中心に細胞新聞の徹底的拡大がカギとなっている。

中央機関紙誌を中心に、その周囲に無数の細胞新聞の発行を！これが中心的任務である。

これを軸に一切の民主的紙誌ならびにその他の宣伝機関の指導と援助に、努力しなければならぬ。これらの活動を通じて党の拡大強化、すなわち党員の積極的獲得、細胞組織の増大を意識的に闘いとらねばならぬ。

すべての党員は、新しい同志の獲得へ！あらゆる経営、部落に細胞の確立を！これが、われわれのスローガンである。

いま、われわれは新しい発展の関頭に立っている。新しい発展は、党と国民との全面的な結びつきの強化いかんにかかっている。

国民諸君は党の奮闘を待っている。強い大きな信頼と権威をもつ党を待っている。この確信をもち、一層深く、一層ひろく大衆の中へ入ろう。

民族解放民主統一戦線の発展と勝利へ向って党の拡大強化に全力をつくそう。

日本労働年鑑 第27集 1955年版

発行 1954年11月5日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2001年10月16日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1955年版(第27集)【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---